

「言語と文化と人」4 言語と文化と教養

いま、ドイツのマルクス・ガブリエルが大人気です。ルックスがよくて、話し方もカッコいい人です。でも、ミュージシャンや映画俳優ではありません。哲学者です。

ガブリエルは1980年生まれですので、まだ40代。今、ボン大学の教授です。かれは『なぜ世界は存在しないのか』という本で一気に現代哲学のスーパースターになりました。この本のオリジナルはドイツ語で、2013年に出版されました。そして、2年後の2015年に英語版が出版されました。日本語版は2018年です。

この本の日本語のタイトルは、正確ではありません。このタイトルだと、世界は存在しないこととなります。英語のタイトルは「Why the world does not exist」となっています。問題は冠詞「the」です。もちろん、ドイツ語でも冠詞「die」がついています。そして、日本語では、冠詞がありません。

この本でガブリエルが言いたいのは、「それぞれの集団にはその集団がイメージしていてその中に住んでいる“a world”（一つの世界）はある。そして、この世界にはさまざまな集団がある。だから、さまざまな“worlds”はある。しかし、誰もがみんな認める“the world”（唯一の世界）はない」ということです。ですから、日本語のタイトルは本当は『なぜ、唯一の世界は存在しないのか』としなければなりません。

動物は、自然のままの体と自然のままの感覚器官で環境と交わって生きています。人間の場合は、文化的に調律された感覚器官で環境と交わって生きています。そして、環境自体も文化的に改変されています。このように文化によって、経験の基盤となっている環境が異なり、そこで生きるために調律された感覚器官が異なるわけですから、文化が異なる人たちが出会ったときに、異なる世界が見えて、異なる世界を経験してしまうのは当然です。「唯一の世界はない」ということです。

グローバル化した現代の社会では、国境を越えた人の動きがますます活発になり、文化、言語、習慣、宗教などが異なる人と接触し交流することが日常的なこととなっています。つまり、多様な背景を持つ人々と調和を保ちながら生きていくことが普通のことになっているのです。そんな時代に生きるわたしたちは、ガブリエルの言う「唯一の世界はない」ということを常に自覚しておかなければなりません。自分自身に見えている世界、自分自身が美しいと思っている世界は、決してみんなに見えている世界、みんなが美しいと思う世界ではありません。

「わたし」に見えている世界は、「みんな」に見えている世界にはなりません。「わたし」にとって美しい世界は、「みんな」にとって美しい世界にはなりません。「わたし」の世界と「あなた」の世界は似ていることはありますが、両者の間にはいつも違いがあります。誰の世界も、「みんな」の世界にはな

り得ないのです。

(1138^じ字)

(2020.12 Written by Koichi NISHIGUCHI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.